

茶の湯 文化学会 会報

第107号 / 2020年12月24日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

密に思う

宮武慶之

茶の湯と密

茶壺の底が見えはじめる名残の時節、世相を反映してか茶席に招かれた客は少ない。茶席での数寄雑談は少ないものの、一碗ずつ練られた濃茶に心が通い合う。徐々にはあるが、ようやくこのような光景がみえはじめてきた。そう考えてみるとき改めて小間の茶の湯を思い返す。密の意味は「隙間なく集まる」「きめが細かい」のほか、「隙間なく触れ合っている」「親しい」などである。当然ながら茶の湯における意味は後者となる。これは客同士ばかりとは言えず、道具の置き合わせもそうである。その例として挙げるなら利休による待庵があろう。想像するに二畳の空間で、点前座から茶を点

て、差し出せばすぐ客前に置かれる。ここに亭主と客の距離として密が生じる。さらに道具はどうか。こちらも想像してみると、隅炬に据えられた釜、さらに点前の進行とともに亭主の方向に真つすぐ引かれた柄杓、水指の前には茶杓のつた茶入と茶筌が置き合わせられ、亭主の前では今、濃茶が練られようとしている。すなわち道具も置き合わされることで密となる。このことよって道具の持つ良さが響き合う。

このことをおそらく近世の茶人で最も意識したのは松平不味であろう。不味の好んだ茶席は総じて二畳が多い。そのためであろうか、不味の所持した茶碗や茶入にはとびつきり大きいものは少ないように思え、どちらかといえば小さいながらも見どころの多い、縮まった作品が多いように思われる。では二畳における亭主の姿というものを少し想像してみたい。茶道口となる襖を開けると正客の顔がみえる。茶道口から見る客というのは意外に遠くに見えるものである。道具の配置も収まるべきところに収まり生きる。さらに懐石などの膳の給仕をしても、少人数ゆえの距離の縮まりを感じる事ができるだろう。ここに密の持つ意味が重層的になる。すなわち茶の湯における密とは客との交わりと道具の持つよさを際立たせる役割があることが知れる。このような場合は、薄茶はどのように行う方が良いのか。そもそも二畳の茶室は貴人、名人、または名物を持たない佗茶人以外には不要とさえ言われた空間である。不味の場合、濃茶を二畳の空間で行い、名物道具を用いた場合、薄茶はおおよそ四畳半の広間が多いこと気付く。

社会的距離

ソーシャルディスタンスは茶の湯に限らず生活の様々な場面で浸透した。人と人との密を避けることであるが、当然茶席の客も距離を保つか、数寄雑談を控えるようになるかもしれない。

ところで先日テレビで、東京とある飲食店の映像が映し出された。屋外に炬燵席があり鍋料理を提供する店の映像であった。何も寒空に外出し、店内ならぬ店外での炬燵で、と思うかもしれないが、要は屋外で換気（寒気）をよくして飲食を楽しむという趣向である。これは当初の理由こそ違え、茶の湯に当てはめると野点に該当する。野点と言えば『南方録』はふすべの茶として次のように紹介されている。

ふすべ茶湯と云事は俗名也、野がけの事也。大善寺山、又当国筑前箱崎松原とて、級休居士のはたらきに、松陰成故、

松に雲龍の小釜を釣て、松葉をかき寄、さわく〜と湯をわかし、きわ立のぼる松原の一、煙の立のぼる体面白しとて、殿下秀吉其後野辺の御時は、たび〜休にも宗無宗及にも、かのふすべ茶の湯を出候へと被仰しより、皆人ふすべ茶湯と云也。

ふすべとは燠と書き、煙立つなどの意味がある。特に筑前松原には利休が釜を掛けた小松があると紹介する。これは現在、九州大学附属病院の奥にあつて、側に利休釜掛の松という碑が立っている。今年の夏に先祖の供養を兼ねて赴いたが、生い茂った夏草が當時を物語っているようである。

松に小の雲龍釜を掛け、野点を行つた記述となる。秀吉が気に入り以後は利休以外にも住吉屋宗無、津田宗及にもふすべの茶の湯を所望したという。

この茶会が開催された時期は定

かではないが、山花開いて錦に似る頃には雰囲気がある茶会となる。また換気も十分。このような野点の趣向の茶会は時として、外出中の急な所望による茶の湯として、いわば正式でなく主たる目的とは別のための茶の湯とみなされる傾向が強いようにも思われる。換気と相手との距離を考へるとき、自然を相手に茶の湯を行う姿はある意贅沢な時間かも知れない。そのためであろうか茶会記として探せばあるであろうが、あまり記録に残ることは少ないように思う。しかし江戸時代後期の茶会では次の記録が確認できる。

文化元年十月二十七日、松平不味は知友を招き、谷園中大茶湯を開催している。茶会記では牛尾宗苔は土段、佐原鞠塙（浅草百花園）が花畑の各席を担当している。牛尾宗苔の土段では、桜の木に安楽庵策伝と堀田相模守による枯野の短冊を掛け床とした。西村道也による十徳釜を掛けた。なお本

歌の釜は神戸藩本多家が所蔵し、茶の湯十徳が鑄込まれた釜となる。水指か水次のためであろうか白木片口、さらに茶器などを収納する旅簞筒が置かれた。茶器には薩摩焼茶入、茶杓は牙を用い、茶碗は半使、楽、御本、茂三、伊羅保の五碗が用いられている。宗苔の立場からみれば、客も多いので気の利いた数茶碗を用意した感覚であろう。なお野点で炭を多く用いるためであろうか芋籠炭斗が飾られた。薄茶で炭点前と聞けば茶事での後炭に相当する心遣いであろうか。菓子には田舎おこしである。次に佐原鞠塙の花畑での茶席。水指を時代薬缶とし、三本の竹で自在と釜を釣つたようである。茶入は唐物大海で、茶碗は萩茶碗、象牙の茶杓である。菓子はもろこし饅頭求肥衣かけとあつて簡素である。野点とはいえ掛物を外したのは花畑の景を掛物不要と介したためであろう。簡素ながらに気の利いた茶席である。

以上のように当然招かれたのは数寄の心に通じた不味をはじめとする茶友であり、野点とはいえ当日の趣向には周到な準備があったようである。なお当日に不味や白酔庵吉村観阿は小間や利休堂で釜を掛けている。

不味没後に観阿が出入りした新発田藩主溝口家は、江戸の茶の湯を語る上で重要な人物である。溝口翠濤の場合は嘉永三年と四年の茶会が確認できる。嘉永三年十月には入谷屋敷で、「ふすへ御茶事」として行われた。すなわち野点による茶事である。客は不詳ながら主だった道具を述べると園内に釣釜を掛け、旅簞筒を二つ用意して濃茶薄茶の区別があったものと考えられる。水次、苺盆、手焙などを出している。中でも注目すべきは薄茶器が瓢一閑とあり、翠濤の交流を考えた場合、観阿の喜寿に際して作られた瓢茶器と目される。また楓の木で作られた茶杓、茶碗は唐津焼などが用いられたよ

うである。懐石も当然ながら野趣の趣向のため重話にした握り飯、香の物に箸を添え、簡略な弁当のような形式で提供されていたようである。そのためテイクアウト可能。次に嘉永四年十月二十四日、千束村にあった新発田藩下屋敷で野点の茶会が催された。客は小堀静太郎、隼人の兄弟、谷村可順、鈴木宗休、鳥羽屋道樹（中興名物茶入「藻塩」、「大正木」などを所持）の五人である。この時、静太郎が野点の趣向に対して一首を詠じている。野点という茶の湯ながらに即興性や手軽な趣向と主客の交わりが想起できる。

おわりに

野点の趣向も近代の茶会などでは二条城の茶会などでも設けられ、馴染みは深い。特に晩秋の昨今、思い出すのは表千家九代家元了々斎が好んだ歌銘である「侘しさを問う人もなき山里に錦をかさる夕紅葉かな」。一入や宗入の茶

碗の銘に用いている。一入のうちの一碗は、長次郎の鉢間に似た形状で、全体には黒い釉薬が掛かり、正面となる部分には鉛に近い朱釉のわずかな景色をみせる。このような茶碗の作行きと、箱書を見つけた時の印象は、まさに侘しい情景と晩秋の夕暮れ時を思い起こす。侘びしい中にも錦を飾る夕紅葉を詠む了々斎の姿は、まさに場所を問わず野の趣向を楽しむ茶の湯の姿といえる。

収束やまないコロナの状況であるが、茶の湯という衣食住に根差した文化の一面は、ふすべの茶の湯に限らず様々な形で一碗の茶を通して人と人の縁を結ぶことができるだろう。

なお末文ながら、かつて松江で開催された茶の湯文化学会大会の席上、故中村利則先生より谷園は谷御園（たにのみその）という教示を賜った。一瞬一瞬、先人の足跡、先学や先師の学恩に感謝するばかりである。

理事会

令和二年度第一回理事会が、十一月一日（日）午後一時よりZoomミーティングで行われた。理事十三名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、令和三年度総会・大会について
- 三、理事の後任について
- 四、会誌・会報について
- 五、その他

第一議題では、各担当理事より令和二年度各地例会について、それぞれ報告が行われた。

第二議題では、令和三年度総会・大会について、研究発表者及びシンポジウムのテーマ「岡倉天心と明治の茶の湯」の発表者は、今年度の予定を移行することが決定された。日程は令和三年六月五日（土）・六日（日）とし、会場は文教大学越谷キャンパスを予定して

いるが、現況では未定。対面・リモート・ハイブリッド等、今後の課題とする。また、見学会の開催も検討していくこととなった。

第三議題では、中村利則理事、谷端昭夫理事、H.S.Hennemann理事の退任に伴い、依田徹幹事・中村幸幹事の理事への推薦があり承認された。もう一人理事の推薦を募ることとなった。

第四議題では、会誌について、山田編集委員長より、会誌三十五号の進捗状況が報告され、予定通り三月末発行されるとの報告がなされた。また、第五代会長の中村利則先生への追悼文の掲載が決定された。

学会誌の特別価格の延長を令和三年十二月二十五日までとし、二〇二十号百円、二一〇三十一号五百円、三二〇三十四号四千元とすることが承認された。

国会図書館東京本館に一〇三号が収められていないこと、関西館に全巻収められていないことの指

摘を受けて、直ぐに発送の手配をすることが確認された。

また、学会誌の電子化へ向け検討していくこととなった。

会報について、編集長を長く務めていただいた池田俊彦理事に代わり、飯島照仁理事に編集長をお願い受けいただくこと、中村幸理事が編集委員に加わっていただくこと、引き続き池田先生には編集委員をお願いすることを提案し、承認された。

例会の報告文が減っており、質問コーナーへのアイデアなど、紙面充実のための協力要請がなされた。また、次の一〇七号は、中村利則先生追悼文を掲載するため、理事、幹事から広く募ることが承認された。

第五議題では、毎年行われていた研究旅行は、今年度アメリカ・ボストンが中止となり、来年度の開催も難しいと思われるため、お茶関係の国内研修旅行を検討することとなった。

次回理事会は、令和三年三月七日(日)午後二時とし、開催場所等は検討することとなった。

例会

東海例会

(令和二年九月十二日)

「茶の湯と染付」

—古染付・祥瑞を中心に—

善田のぶ代

我国で「古染付」「祥瑞」と呼ばれる一群の青花磁器は、中国・景德鎮(現江西省)の民窯で、明末の十七世紀前半から中葉にかけて生産され、同時期に舶載されたものと考えられている。古染付は天啓年間(一六二一—二七)を中心に、また祥瑞は古染付盛行の後、崇禎年間(一六二八—四四)を中心に生産された。いずれも当初から茶の湯の用を充たすことを目的として焼造された水指や香合、また懐石の器などを中心としている

ため、我国からの注文品と考えられている。他に碗・皿などの日常器も多数伝世している。古染付・祥瑞の研究上の最も大きな課題は、注文の経緯や注文主についての具体的な資料が十分では無く、推測の域を脱していないことである。そこで茶の湯において染付がどのように取り入れられていったのか、その経緯を十六世紀から十七世紀の状況を示すことで注文に関する課題に迫ってみた。

とくに注目されるのは、元和(一六一五—二四)・寛永(一六二四—四四)年間の徳川将軍家の茶会に(『二代三代将軍御会記』)、数寄屋での茶に染付茶碗と染付香合が記録されていることである。茶碗は「紀三井寺」と記載されており、これは十五世紀の景德鎮窯で焼成された雲堂手の香炉を転用したものである。将軍家の茶会で染付が使用されたことは染付が本格的に茶の湯で受容されたことと捉えることが可能であり、古染付・祥瑞舶載

の契機と考える。当時の將軍家茶の湯指南は小堀遠州（二五七九—一六四七）で、染付の使用に遠州が関わっていたことは明白であり、また従来古染付・祥瑞の注文主として遠州が筆頭に挙げられているが、こういった側面からしても筆者も同様に考えるものである。

金沢例会

（令和二年九月六日）

「茶の湯各流派の点前」

廣田吉崇

平成二十七年に刊行した拙著『お点前の研究—茶の湯流派四十四流派の比較と分析—』に基づいて点前の比較研究について説明した。最初の段階では、風炉薄茶運び点前の一連の所作・手順を項目に細分化し、類型化を設定することにより、十三流派の点前を相互に比較した。その結果、最も異なるのは裏千家流と遠州流との九%、最も似ているのは武者小路千家流と松尾流との九十一%、ち

なみに表千家流と裏千家流とは八十四%という数値が導かれた。

四十四流派に増加した段階では、流派を①千家系Ⅰ、②千家系Ⅱ、③有楽系、④南坊系、⑤その他、⑥石州系、⑦三齋系、⑧遠州系の

八グループに分けて検討した。分析方法は、まず多変量解析により四十四流派をx-y平面上に分散させたグラフを作成し、千家系流派とそれ以外の非千家系流派とはグラフ上明らかに分離しており、五つの非千家系流派の各グループはそれぞれ分離する傾向にあるなどを確認した。このグラフは現在における流派の多様性を示すものといえる。そして生物学の系統推定を応用した文化系統学的分析により系統樹を描いて検討したところ、茶の湯の系譜と合致する部分と矛盾する部分との両面が見られた。点前の変化の方向性について、千利休の子孫である千家流が千利休の教えを厳格に守り、武家茶が点前を武家風に変化させたと、一

般的に評価されているだろう。しかし、茶碗の仕込み方の項目によれば、非千家系流派が古い形を残し、千家系流派が大きく変化したと考えられた。

さらに、流派はかならずしも自然発生的なものではなく、場合により点前の再構築という現象が見られることを指摘し、拙著以降の研究成果として、遠州系六流派、井伊直弼系三流派を点前の四項目により分析し、流派により点前を再構築した可能性を論じた。さいごに、西山松之助氏の『家元の研究』を批判的に検討し、伝統文化を守り伝えるべき家元は、実際には伝統文化を変えていくことにより存続する、逆説的な存在であることを指摘した。

追悼

去る十月十一日、第五代会長の中村利則先生が逝去されました。

中村先生は長年にわたり、本学会を支え、お導きくださいました。多くの思い出が去来いたします。理事・幹事より追悼の言葉が寄せられました。

「杯は正座して受けるべし」

田中秀隆

中村利則先生に、はじめてお目にかかったのは、一九八三年、小学館のことだった。『茶道聚錦』の刊行準備にことよせて、美術図書の編集部が、茶の湯に関する研究会の世話をしてくれることになり、熊倉功夫先生と赤沼多佳先生によって、「茶の湯懇話会」が結成された。竹内順一先生、谷端昭夫先生、田中博美先生といった第一線のメンバーに、横文字を縦文字に直す輸入学問の大学院生であった私も、予定執筆者の一人として加えていただいた。中村利則先生の『町家の茶室』を近著として合評するのが、ごく初めのころのテーマではなかったかと記憶する。

先生とは、知人や、干支などいくつかの共通点があった。もつとも親近感をもった共通点は下戸であることかもしれない。合宿先の夕食で、お互いに酒に弱いことを確認した後に、「それでも無理やり飲まされるときもあるから、その時は正座をして注がれるのを受け、正座するとなぜか酔いが回らなかった」と話された。個性の強い師匠筋との一筋ならない関係に苦勞された先生は、後進には、常に温和で優しく接してくださった。

茶の湯懇話会は、「山上宗二記研究」に一石を投じた後、『草木』の検討に入り、二〇〇〇年ごろから京都のメンバーも加えて、京都で例会を行うようになってからは、先生の文化環境計画研究所を数年間、常設会場としていた。打ちっぱなしのコンクリートの壁面にぎっしり並んだ本は、京都の底冷えする寒さを幾分か緩和してくれたような気がする。

二〇二〇年三月からのコロナ禍

は、懇話会を開催不能にするだけでなく、常会場としていたホテルの閉館にまで猛威を振るった。

移動制限の解除された七月、京都駅近くのホテルの会議室で行った茶の湯懇話会に出席された先生は、『松屋会記』翻刻の指図の不備を指摘するなど先生ご出席ならでの会合となった。終了後、「年内は、懇話会の会合は控えておきたいのですが」と申し上げた時に、「しやうがないやろね」とおっしゃったのが、最後のお別れになるとは、思わなかった。

思えば、先生が私を引き上げてくださった年齢からずいぶん年をとった。利則先生を見習い、若手とも熱く議論することで学恩に報いなければならぬと思っている。

「中村利則先生を偲んで」

中村 幸

利則先生のゼミ生だったある時、他愛ない雑談の中で朝鮮半島と日本の、反物と裁縫の尺の関係

が興味深いことを私が告げると、先生は急に黙り込み、いつもとは違う面持ちで、うつむきながらポツリとおっしゃいました。「……どうも……、日本海側（の古建築）は尺が違うんだ……」私はそれを聞いた瞬間、途方もない広域の実測数と視座のスケールにめまいを覚え、やっとの思いで深くうなずき、そして共に沈黙してしまいました。それをかたちにする口約束は、今もそのままです。蟬時雨の屋根裏に這い上がったり、積雪の縁の下に潜ったり、方々調査をしたのが昨日のこのようです。謹んで利則先生のご冥福をお祈り申し上げます。

「中村利則先生を偲んで」

原田茂弘

私をはじめ中村利則先生にお目にかかったのは大学院生の時であつたと思います。熊倉功夫先生におすすめいただき、中村先生が東京にある茶室を現地で解説して

くださる講座に参加させていただきました。その頃、茶室の知識がまったくなかった私にとつて、中村先生のお話はとても詳しく、しかも明解であつたことを覚えています。

その後、本学会の編集委員としてご一緒に仕事をさせていただく機会に恵まれました。先生はどんなことにも真摯に対応され、学会のためにお力を尽くされるお姿をいつも間近で感じておりました。またそうしたなかで、先生から折にふれて茶室に関するいろいろなお話をうかがうことができたのはとても貴重な勉強になりました。

中村先生の千家の茶室に関するご研究のなかで、私はことに「茶室にみる千家の流れ」（『千家の茶の展がり 宗全 不白 宗達』（平成七年、婦人画報社）という論文から多くのことを学ばせていただきましたが、私が強く印象に残っているのは、表千家不審菴に伝わる江岑宗左茶書の史料的な価値をたいへん高く評価しておられたこ

とです。江岑宗左自筆の茶書(二十点)は今から二十三年前、而妙

齋千宗左宗匠監修・猶有齋千宗員

宗匠編集により『江岑宗左茶書』

(平成十年、主婦の友社)として

刊行されました。『茶の湯文化学』

六号(平成十一年三月刊)には

『江岑宗左茶書』をめぐって」と

題し、村井康彦先生、谷晃先生、

中村利則先生の対談が収録されて

います。この対談を最初にご提案

されたのも中村先生であつたよう

に記憶しています。私は幸いにも

個人的に直接、中村先生から江岑

宗左茶書にみる新たな発見や史料

としての魅力についてお話を聞

きする機会がありました。先生は

とても熱心に語ってくださいまし

た。あらためて学会誌に掲載され

た対談を拝読していると、その時

のことが思いおこされます。

中村先生にはまだまだ多くのこ

とをお教えたきたかたです。

先生のご冥福を心よりお祈り申し

上げます。(表千家不審庵文庫)

「利則先生と茶の湯文化学会
で二緒した思い出」

八尾嘉男

共通の社会で同じ名字の方が多

いというのは不思議にあるもの

で、茶の湯研究では、「中村」姓

の方が多いのはみなさまご存知の

ことである。なので、下のお名前

でみなさま呼んでおられ、私も最

初から何の違和感なく「利則先生」

と呼ばせていただいていた。

私が利則先生を最初に茶の湯文

化学会でお見かけしたのは、はっ

きりと覚えていない。おそらく私

が大学院に通っていた学生時代で

あつたと思う。利則先生の回りに

は絶えず人がいらつしやつたこ

と、報告に対して、指摘すべきこ

とは流すことなく指摘されていた

印象はしっかり残っている。

利則先生と二緒する機会が増

えたのは、谷先生のご推薦で幹事

の役職を学会で拝命してからであ

る。時間ギリギリや遅刻が私は多

いが、近畿例会や大会、見学会

の準備に幹事として参加すると、
利則先生はいつも早めにいらつ

しゃつていた。見学会や国内の研

究会に参加されたみなさまには、

「やらされているんです」と仰ら

れつつも、あくまでそれは話のつ

かみであり、お話をされる利則先

生は笑顔で楽しげであつたこと

をご記憶だと思ふ。

役員として接した記憶でいえ

ば、控え目ななか、事務や裏方が

動きやすいように目を配つてお

れたことがあり、学ぶところが多

かつた。人手が足りないときは、

先生ご自身の裁量でゼミ生にお声

がけくださり、その助けは心強

かつた。

利則先生とは、ゼミ生の方が間

を取りもつてくださつて、私と同

じく学会幹事の松本康隆氏と一緒

にお酒の席に招いていただいたこ

ともあつた。利則先生と二緒す

ると、私はついお酒が進みすぎる

ことが多く、あとで反省すること

もあつたが、このときはゼミの一

端に触れ、その楽しさに魅了され
たことを覚えている。

私は、利則先生が亡くなられた

ことは学会からの連絡で知り、お

通夜でお別れをすることができ

た。先生に感謝とお別れのご挨拶

を済ませると、回りではかつての

ゼミ生がたくさん駆けつけてお

られた。そこかしこで再会を懐かし

む顔があり、ゼミの時間を楽しん

だ利則先生からゼミ生へのプレゼ

ントのように感じた。そして、私

もまたその雰囲気につられて気持

ちが和み、家路へと着いた。場違

いながら、あれは二度目の魅了

だったのかもしれない。合掌。

「中村利則先生の思い出」

岡 宏憲

私の中村利則先生との思い出

は、茶の湯文化学会の大会にお

いて毎度幹事として準備に臨むにあ

たり、いつもニコツと笑つて「宜

しく頼むね」とお声掛け頂いたこ

とです。私は大学や美術館等の研

究機関には所属していませんが、そのような者にも分け隔てなく接して頂き、気にかけて頂いたことは大変勇気づけられ、嬉しく感じました。あの柔らかな笑顔にもうお目にかかることが出来ないと思うと、胸が締め付けられる思いです。中村利則先生が本学会や茶の湯研究に遺されたものは、私が容易に言い表すことは出来ませんが、次の世代へと引き継いでまいりたいと思います。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

「中村利則先生を偲ぶ」

木村栄美

中村利則先生は、私の人生においてももともと尊敬できる恩師である。私は、京都造形芸術大学（現京都芸術大学）大学院における利則先生の最初の指導学生だった。利則先生は尋常でない晴れ男で、いつも楽しいお話をしてくださり、どんな質問にも誰でも納得させてしまう答えをくださった。

ただ口癖が多く、口癖を毎回数えてみたりもしていた。一方で執筆は苦手で、いつも原稿から逃げていた。しかも、先生の書き物はなかなか解説困難であった。日常ではちよつと浮き世離れた部分があつて、武勇伝も多々残っている。

利則先生との出会いは、大学院入試の面接の時だった。研究とは何かをよくわからず、ただお茶が好き、という安易な理由から大学院を受験した私に対して、「一から勉強をし直しなさい」というのが、最初にかけられた先生からの言葉だった。入学したての頃は毎日研究室に通うよう言われ、先生から提示された文献史料をただひたすら読んでいた。言葉を発することができず、重苦しい沈黙の時間が夜遅くまで続いた。半年近くこの見放されたような状態が続き、正直研究室に通うことが苦痛だった。しかしこれは、ともすれば固定概念に陥りがちな私を柔軟にして、基礎を学ばせようとする

ための準備期間だったと思う。週末には、利則先生の熱烈なファンクラブ（？）が企画したツアーに先生のアシスタントとして、普段は入れないような茶室等々に連れて行ってもらったりした。

当時利則先生は大学内では学科長及び専攻長というお立場、外では講演等々引つ張りだこで本当に多忙だった。でも指導学生が一人ということもあつて、先生の指導は厳しく熱心だった。思えば恵まれたかなり贅沢な環境だった。研究に対して、決して妥協を許さなかった。あらゆる史料を徹底的に調べ、実際のものを見ることも重視し、そして総合的で着実な観点を求められた。しかし押し付けるとかでなく、学生たちの考えや物事を尊重しつつうまく誘導していた。

利則先生は過保護になることも多々あった。研究発表の場で、当時学長だった芳賀徹先生（二月に逝去）が私にした質問へ、すべて

利則先生が答えてしまったことがあった。徹先生は「私は彼女に聞いているのに、なぜ君が答えるんだね？」と苦笑されていた。

責任感が人一倍強い利則先生なので本学会の会長に就任された時、勿論相当な覚悟もありだったと思うが、堺で研究会をやりたい、若手研究者をもつと育てたい等々いろいろと構想を練って案をおっしゃっておられた。だから、何もできないまま会長を辞さなければならなくなった時、おそらく誰よりも口惜しかったと思う。

昨年突然大学の授業を手伝え、と呼び出された。めつたに弱音をおっしゃらない先生には珍しいことだったが、今思えば相当具合が悪かったのだろう。それに気づかず長い間何度も死と戦って生還されてこられた先生だから、私はまたきつとお元氣になられる、と樂觀視していた。

今はただ安らかにお眠りください、とお伝えしたい。

「中村利則先生を偲ぶ」 佐藤留実

今から二十五年前、東京の五島美術館で開催された「山上宗二記―天正十四年の眼」展（一九九五年）。紅葉が色づきはじめた十一月二十一日・二十二日に行われた「山上宗二記」シンポジウムには、さまざまな分野の研究者が一堂に集いました。それは歴史、茶道史、国語学、陶磁史、絵画史、書史学、建築史などにおよび、茶の湯を媒介に錚々たる先生方が出席されました。中村先生と初めてお会いしたのは、その発表者のひとりとしてお越し頂いた時でした。先生の発表テーマは「茶室にみる利休像」。茶室の構造やその成立などを考察され、そこから利休の茶に辿り着く手法は、当時の私にとって斬新で新鮮な視点でした。当日はシンポジウムのスタッフとして慌ただしくしており、高名な先生を前にして、ただご挨拶するのが精いっぱいだったと記憶していま

す。また、「山上宗二記」関連のビデオ作成においても、茶室情報では大変お世話になりました。私はナレーションを担当し、「四畳半」、「深三畳」などの解説の台本は中村先生の成果によるものと上司から聞かされておりました。以後も、先生は茶の湯文化を語る際にはなくてはならない存在としてご活躍をされたの言うまでもありません。年月は過ぎ、五島美術館の紅葉はお会いした日と同じように色づきはじめました。もっとご教示を頂きましたかという思いが残るばかりです。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（五島美術館主任学芸員）

「中村利則先生を悼んで」 砂川佳子

「この卒業論文を茶の湯文化学会の大会で発表してみませんか。」卒業論文もほぼ書き終えて、あとは審査結果を待つばかり、という頃、指導教員であった中村利則

先生に誘われたこの一言から、私の研究人生が始まった。

せっかく卒業論文をまとめたのだし、先生が薦めてくださったということもあり、さっそく茶の湯文化学会に入会し、大会発表に応募したところ、採用された。平成二十四年（二〇一二年）のことであった。

その後、大学院に進学し研究を続けることになるとは思っていなかったため、最初で最後の学会発表だと思っていた。院では直接指導を仰ぐことはなかったが、先生この一言がなければ、学会や研究の世界に足を踏み入れることはなかっただろう。

大学院も無事修了し、研究者の卵として歩み始めたころ、再び利則先生から声を掛けられたことがあった。

「早く博士号を取りなさい。」今回も先生が薦めてくださったということもあり、さっそく博士課程に進学しよう、とはさすがに

ならなかった。博士課程へ進学した暁には、先生に御指導賜りたかったが、見果てぬ夢となつてしまった。

博士号取得が先生への供養となるか覚束ないが、少しでも研究を進めることが恩返しになると信じていた。

「中村利則先生の思い出」 松本康隆

茶室研究の先達の一人として、是非一度お話しさせて頂きたいとかねてから願っておりました。中国で仕事をすることとなり、その前にどうしてもお会いしたく、友人にお願ひして食事のセッティングをしてもらいました。食事の後、利則先生は行きつけのカラオケにまで連れて行って下さいました。私が中国へ行くに際し、温かく激励して下さいて下さることをひしひしと感じました。中国での仕事に落ち着いたら、いずれゆっくりとお話しできる機会をと思ってい

ましたが、この思い出の寄稿依頼
メールで利則先生が亡くなられた
ことを知りました。今まだ心に虚
空のようなものを感じています。
お会いした時の優しい笑顔が今も
私を激励して下さっています。ご
冥福をお祈り申し上げます。

(南京工業大学 特聘副教授)

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する
場合がありますので、ホーム
ページまたは事務局までお問い
合わせください。

東京例会

令和三年二月二十七日(土)
午後二時～

会場：未定

「宗湛日記の茶会における「盆」
の使用(仮)」

作山裕美香

「『南方録』における茶の湯の系譜

―「達磨」「趙州」を手がかりに―
櫻本香織

近畿例会

令和三年未定

午後二時～

会場：未定

「陸奥八戸藩における茶の湯(仮)」

廣田吉宗

「『薫集類抄』の新出第九写本の系

統について(仮)」

矢野環、武田貴美子、田中圭子

もしくは

「いわゆる『称名院名香合』につ

いて(仮)」

矢野環、武田貴美子

新刊案内

『住総研住まい読本 和室学 世

界で日本にしかない空間』

松村秀一・服部岑生編 平凡社

定価三、四〇〇円＋税

『高橋箒庵―近代数寄者の語り部』

齋藤康彦著 熊倉功夫・筒井絃一

監修 宮帯出版社 定価三、五〇

〇円＋税

『現代語訳 大正名器鑑 唐物茶

入編』

高橋義雄(箒庵)著 宮帯出版社

編集部訳 宮帯出版社 定価九、

〇〇〇円＋税

お知らせ

このたび、会報にて第五代会長
中村利則先生への追悼の言葉を掲
載させて頂きました。中村先生の
ご逝去が突然でしたので、会員の
皆様にはご連絡が遅くなりました事
ことを、お詫び申し上げます。

つきましては、次号会報にも中
村先生への追悼の言葉を掲載させ
て頂きます。会員の皆様からも募
集いたします(五〇〇～一〇〇〇
字程度)。令和三年二月二十日ま

でに学会事務局にお寄せ下さい。

令和三年度

総会・大会のご案内

令和三年度総会・大会を左記の
日程で計画中です。詳細は令和三
年四月に郵送にてご案内いたしま
す。

日 程：令和三年六月五日(土)・

六日(日)

テーマ：「岡倉天心と明治の茶の
湯」

※事務局の年末年始の休業は、令
和二年十二月二十六日(土)～
令和三年一月四日(月)となり
ます。

※年会費未納の方は、至急払込み
くださいますよう、よろしくお
願いいたします。

